

---

# ハート・オブ・ザ・ギア

殻史二五二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハート・オブ・ザ・ギア

### 【Nコード】

N2698X

### 【作者名】

殻史二五二

### 【あらすじ】

第四次世界大戦の終戦と共に生まれた新たな種 ドローン。戦争の傷跡を今だ深く残す。荒廃した世界に一台のトラックが走る。

目的も何も無く。ただ、荷台には人類の敵であるロボットを乗せて、少女が運転する車は走ってゆく。

両親を殺され、自らを強化人間にした少女。シャロンはドローンと呼ばれる人型殺戮兵器を狩るハンターとなった。

ドローンを狩りながらも決して晴れない想いを抱えて生きる少女

に転機が訪れる。

心というモノを知らながら心の欠けた少女のシャロンと人としての心を持ち、自分が何故生み出されたのか解らないドロンのホープが織り成す物語です。

少女は薄れてしまった記憶を取り戻し心から笑うために……ドロンは自分の存在する意味を求めて……

## 始まりの螺子

埃が舞う室内は陽光が道を作る。

天井ではプロペラがキーキーと不快な音を立て、ぶら下げられたクラシッくなオイルランタンを微かに揺らす。

薄暗い闇の中には数人の男達が真昼間から酒を酌み交わし、バーカウンターの向こうでグラスを磨く男の存在だけが酒場である事を唯一物語っている。

すえた匂いが漂うような雰囲気、やや広めに作られた酒場に立ち込めていた。

外とバーを繋ぐドアが勢い良く開かれると、退廃した負の雰囲気とは真逆の底抜けに明るい声が積もった埃の中に飛び込んでくる。

「たつだいまー！ 今日もあつついわ。とりあえず、マスター水ちようだい！ みずず〜！」

化粧気の無い顔に汗を滲ませた少女はバーのカウンターシートへとダルそうに腰を落とす。

年の頃なら十七、八と言った所か。埃と日の光に晒され続けたせいでくすんだ銀髪を肩で切りそろえた姿は活発な少女のような印象を受ける。

しかし、少女の見た目よりも誰もが最初に目を向けるのは、その背中に背負った長大な銃であろう。一六十センチはある少女の背丈よりも大きな銃は一見して銃には見えぬ、長方形の大きな金属ケースか悪く言えば黒い棺に見える。

決して軽くは無いであろうその物体を軽々と背負いながら少女は入ってきたのだ。現に頑丈そうなカウンターシートが軋みを上げて、今にも壊れてしまいそうだ。

「シャロン……。前から言ってるだろうがッ！ お前のデカイ尻はまだしも背中にも背負ってるブツは、椅子には酷だから床に置けと……それとも何か？ お前は店の椅子を全て新品に換えるボランティアでもはじめたのか？」

バーカウンターの途中でグラスを磨いていたマスターと呼ばれた初老の男性が、その手を止めると店で唯一電気で稼働している冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、グラスに注ぐ。

「そう固い事いわないで …… お〜けー！ わかったからそんな恐い目で見ないですよ……置きます！ 置けばいいんでしょー？」

殺気の籠った目で見られて、暑さによる汗とは違う汗を背中にかきながら、軽々と肩に掛かった銃の革ベルトを引き上げた。しかし、その拍子に緩んでいた止め具が外れてしまう。当然の如く巨大な鉄の固まりは重力に従って床へと吸い込まれてゆく。

次の瞬間には椅子の後ろに大きな穴が開く音を聞く羽目になった。

「 …… シャロン……ッ！」

「ちよ……ちよっとまって伯父さん！ 今のは不可抗力！ 事故！ 魔が差したただけなの！ だから、ブラックホークはやめて……ぷりーず……」

マスターが殺気を放ちながら腰の後ろにある銃に手を回すのを、シャロンは可愛らしく手パタパタと振って止める。

そして、シャロンは慌てて椅子から飛び退くと大穴をあけた銃を引っ張り上げて、器用に立ったまま、床に着けんばかりに何度も頭を下げる。

その姪っ子の余りの情けない姿に一つ大きな溜息を大げさに吐くと、注いだミネラルウォーターをカウンターに置いた。

「まったく、そうどうしてがさつなんだ。お前はッ。それに店ではマスターと呼べと言っているだろう?」

「面名次第もございませんです……はい……」

借りてきた猫のようにうな垂れると店の端にある武器を置くスペースに鉄の箱を立て掛ける。

「ところでハントは上手くいったのか?」

未だ少しうな垂れているシャロンに向かって、マスターは苦笑を漏らしながら言葉を掛ける。

その声音から既に怒っていないのだと悟り、一瞬前とは打って変わって元の明るい表情で顔を上げる。

「もっちろん! 表のトラックにドローンの残骸を積んであるからジエネレーターとバッテリーの買取りお願い。残りはスクラップ屋に持っていくわ」

「メモリーユニットは?」

「それも積んであるけど、賞金は?」

「手数料はもちろん貰う」

無情なマスターの言葉に、シャロンは小さく肩を竦める。

「世知辛い世の中……いいわ。中央まで持っていくのも面倒だし、それも買取りよろしく。あ! もちろん、親族特約は効くのよね?」

「馬鹿言え! ここじゃ、ハンターの一人としか扱わん。それがお前が望んだことだろう?」

マスターは綺麗に整えられた口髭を手で撫でつけながらニヤリと  
獰猛な笑みを浮かべる。

新暦二八三五年に勃発した第四次世界大戦は世界中を戦火に晒した。戦端を開いたのは一説には共和国が核攻撃を行ったとか、帝国が大量虐殺を行ったとか、果ては宇宙人の陰謀という眉唾ものまである。

只、今では何が切欠で百年にも及ぶ大戦が引き起こされたのか知る者はいない。

だが、実際に第四次世界大戦は勃発し、世界は荒廃の極みに立たされたのは紛れも無い事実である。

戦火は人を……兵士を大量に消費し、そして、人類は戦争の形を変えたのは必然だったのかもしれない。

戦争が科学を発展させる 誰が言ったかは定かではないが、それはある意味、第四次世界大戦でまざまざと人々に思い知らせる結果となった。

無人兵器による代理戦争である。

航空兵器は言うに及ばず、陸上兵器……人型兵器 通称【ドローン】が誕生したのだ。

兵士の代わりに戦うロボットといえば格好はいいが、実際は人を殺す事に何も感じない冷酷なる殺戮機械……それが【ドローン】である。

ドローン技術は瞬く間に世界中へと広まっていった。どの国も兵士の疲弊とが深刻な問題となっていたのだ。

競い合うように世界中で新型ドローンの開発が進められた。

それが破滅への道とは知らずに……

ある時、どこかの国が何を考えたのか、ドローンに人の感情というものを植えつけたのが始まりだった。

そのドローンは自己を確立し……そして、暴走を始めた。

それだけならば単なる事故で処理されて終わりだっただろう。だが、何より決定的な問題だったのは、そのドローンが高度なハッキングシステムを搭載していた事だ。

何も感じないドローンに感情を生み出させる。そんな狂気のプログラムがドローン中に拡散した事に人間が気付いた時には、もう既に手遅れとなっていた。

その頃には既に外部回線を持つ端末はおろか、本来外部との接続回線を行うことが無い軍中枢の孤立したコンピューターまで侵食されていた。

各国の軍内部どころか政府首脳まで混乱を極めた。

何故ならその時、現存する核ミサイルコントロールまでも、感情を持った最初のドローン【通称ディザスタ】に依って奪われていたからである。

そして、来るべき終末とも呼べる時が訪れ……第四次世界大戦は人にとって予想外な終戦を迎えたのだ。

世界に新たな種　ドローンを産み出して……

「景気がいいのは結構な事だが、余り狩り過ぎるなよ？　狩り過ぎは他のハンターが割りを食う。要らぬ恨みを買う嵌めになるぞ」

マスターの苦言に、シャロンは手をパタパタ振りながら水を口にする。

そして、空になったグラスをカウンターへと置くとケラケラと笑った。

「この辺りでドローンを狩れるのは、私くらいのものでしょ。他は精々がセコい賞金稼ぎじゃない？」

その言葉に微かに含まれた棘に刺激されて、酒場の隅でテーブルを囲っていた数人の男達が反応を示した。

シャロンは入ってきてから気が付きもしなかったが、そこには昼間から酒を煽るハンター達がいたのだ。

「チビクソガキが調子に乗りやがって……」

「おい！ よせよ。あんなナリでもナノドロイドだぞ」

ヒソヒソと小声で話す男達の声を、かなり離れたカウンターでも強化されたシャロンの耳ははつきりと捕らえていた。

ナノドロイドとは政府がドローンに代わる技術として開発したものである。細菌レベルにまで小さくした有機ナノマシンを人体に投与し、頭に埋め込んだ特殊なチップを用いて制御する最新技術だ。

全身の細胞にナノマシンを同化させる事によって人体の限界を超えた力を得ることが出来る。

その反面、これには最大の難点が存在した。

適合できる人間が極少数しか存在しなかったのである。

大概の人間は体内で爆発的に増殖をする有機ナノマシンに耐え切れず、肉体が加速度的に劣化　つまり老化して数時間も経たず老衰で死んでしまうのだ。

適合確立は千分の一とも万分の一とも言われている。

「ねえ、マスター？」

いつもより幾分か高い猫撫で声に、マスターは気付かれないように小さく溜息を吐く。

「……なんだ？」

「私の記憶が確かならここはハンターズバーのはずよねえ？　いつ

からタマ無し野郎がいるオカマバーに鞍替えしたのお？」

明らかに男達へと聞こえる声で、挑発するように言うとガタンと一人の男が立ち上がった。

シャロンは慌てもせずにそちらへと挑戦的な視線と笑みを浮かべる。

「聞いてりゃ。偉く自信満々じゃねーか！ このハーフドールが！」

【ハーフドール】それはナノマシンに唯一適合し、超人の様な力を得た人間に対して付けられた蔑称の一種である。

有機マシンを適合させるといふ事は細胞が機械の一種に変わるといふことなのだ。

「あら？ いい年したオジサンはお人形遊びがお好き？ そっか！ 心は乙女だもんねえ？」

顔に笑みを浮かべて、小首を傾げる姿は年よりもシャロンを幼く見せた。だが、その実態はドローンと互角に戦う事のできる強化人間なのだ。

余裕とも取れる笑みに男達は無意識に気圧される。しかし、立ち上がった男はもう後に引けなくなっていた。

「表出るよ……。その可愛い面をグチャグチャにしてやる……！」

「お……おい！」

テーブルの脇に立て掛けてあった軍用のショットガンを手に取る  
とイスを蹴り倒しながら凄む。それは慌てて仲間の男が止めようとするが、その時には男の姿は既に出口へ向かって歩き出していた。

「こわあい！ けど、潔い男の人は嫌いじゃないな。ハンターとしては失格だけど……？」

手で口を押さえてクスクスと笑いながら、シャロンもカウンターシートから立ち上がった。

「シャロン……」

その姿にマスターが声を掛けるが、シャロンはマスターが何を言いたいのかわかっていた。

「わかってるわ。伯父さん。『殺すな』でしょ？ ちゃんと手加減するわ」

「伯父さんじゃない。マスターだ……。わかっているならそれでいい」

「私の心配は？」

マスターは空になっていたシャロンのグラスにミネラルウォーターを注いで、苦笑を浮かべながら肩を竦める。

「心配して欲しけりゃ、政府軍でも敵に回せ。そうすれば神に祈ってやってもいい。お前の頭を少しはマトモにしてくれってな？」

ニヤリと笑みを浮かべるマスターにシャロンは小さく溜息を吐いて肩を落とした。

ハンターズバーは傭兵、ドローンハンター、賞金稼ぎ……果ては冒険家などという風変わりな者達が集う場所だ。揉め事の一つや二つは日常茶飯事である。

その揉め事の中でも幼く見える容姿や性格のせいで、シャロン絡

みが一割から二割なのだ。マスターとしても伯父としても、既に慣れっこになるのは当然の事なのかもしれない。

その言葉を激励として受け止めても、何か腑に落ちないものを薄い胸に抱えたまま背中影を背負い店の出口へと向かって歩いてゆく。だが、武器は店に置いたままである。

シャロンが扉を開けて外に出ると、昼を少し過ぎた太陽は寂れた街にその暴虐な光を容赦なく与え続けていた。薄闇に慣れていた淡いルビーのような瞳を細めて眉根を寄せる。

寂れて人通りも殆ど見当たらない街のメインストリート。そこにはシャロンと同じように目を細めた厳しい男が立っていた。

服は所々擦り切れ、アーマーベストや露出している肌も装備同様、細かい傷が目立っている。そして、軍でも正式採用されている大口径のショットガンを両手で持つ姿は、チンピラ程度の悪党ならばすぐに尻尾を丸めて逃げていくだろう。

一瞬だけ、先ほどのセコい賞金稼ぎの言葉を取り消してもいいかなど、シャロンは思ったが男が発した次の言動で、セコい賞金稼ぎですら過剰評価だったと思ひ直した。

「遅いからビビって、大好きな伯父様の後ろでガタガタ震えてるのかと思っただぜ」

男は嫌らしい笑みを浮かべながら、大口径のショットガンを掌で弾ませて弄ぶ。シャロンはその姿を見て、盛大に溜息を吐いて帰りがたくなってきた。

（軍用の銃は手荒く扱われる為にあると言っても過言じゃないけど……プロとしてそれってどうよ？ 暴発でもしたらどうするつもりなのかしら……？ あの馬鹿）

ここアウトサイドと呼ばれる荒れた大地には、何もかもが粗悪品しか存在していない。

唯一例外なのは直輸品と呼ばれる物で、その価値は普通の物と比べても非常に高価である。

シャロンの目の前に立つ男はどう見ても稼ぎの良い様には決して見えず、弾も手入れのされていない粗悪品であるだろう事が一目でわかる。

そんな弾の入った銃を手荒に扱えばどうなるか？ アウトサイドでは子供でもわかることである。

「どうした？ 後悔したってもう遅いぞ。ドローンモドキが！」

戦意の大半を喪失していたシャロンだったが、男の放った言葉の最後に目が焼けるような感覚に見舞われる。

【ドローンモドキ】ナノドローンの蔑称の一つだが、シャロンは他になんと言われようと、この蔑称だけは受け入れられなかった。何故なら、自身の両親を殺したのが暴走したメイドドローンだったからだ。

「……………そう……………、そんなに死にたいのね？ いいわ。戯言は聞き飽きた。チャッチャとかかかってきなさいよ」

感情を感じさせない絶対零度の言葉と、目の前にいるシャロンの異様な雰囲気、男のショットガンを弄んでいた手がいつの間にかじつとりと湿ってきていた。

そんな、男の様子を気にしていないようにゆっくりと足を踏み出して、男の正面……………距離にして七、八メートルの位置に立つと、口元に聖母のように優しい笑みを貼り付けて両手を広げる。

しかし、目だけは決して笑っておらず、まるで道の片隅に捨てられた犯罪者の死体を見るかのように冷ややかだ。



散弾がすぐ後ろを掠めても決して焦る事は無く。頭は澄んだ水面のようにクリアになっていくのがわかる。

口には先ほどとは違う笑みが浮かんでいた。

その笑みを見る余裕のある者がいたならば、目にした時に体が固まる感覚に襲われていた事だろう。凄惨で愉悦に満ちた人が浮かべてはならない歪んだ死の微笑みである。

(……………ろおしく……………)

そこまで数えてから、シャロンは建物に向かって跳躍する。

男は窓を破って逃げる気かとそれを追って走り出す。しかし、それは大きな勘違いだった事を直後にわかった。

宙に浮いたシャロンの体は窓とは遠く離れた壁へと向かっていたからだ。

それを見ると男は厭らしく笑って、今度は慌てずに狙いを定める。着地地点へ。

しかし、それは予想をはるかに超える光景に裏切られた。

壁を蹴るはずのシャロンの体は一向に落ちてこず、不思議に思った男が視線と銃口を上げた時に自分の認識の甘さを呪った。

視線の先 建物の壁があるところには、シャロンが垂直に立ち男を“見上げて”いたのだ。

満面の笑顔で……………

(バケモノ！ 化け物……………)

「この……………ばけものがあああー！」

叫び声を上げて引き金を引く。男は聞こえるはずのない声を聞いたような気がした。銃の咆哮が鳴り響く中で、確かに聞こえたような気がしたのだ。

『化け物なんて、ひどいなあ……………』

そして、男の頭を掠めるように通り過ぎて、今度こそ間違いなくシャロンの声が男の耳をくすぐった。

「ぎゅんねん……本当にタマ無しになっちゃったね……？」

鈴が転がるような涼やかな声が聞こえてきたのは男の横　耳の直ぐ傍であった。

それに反応するように次弾を装弾して、振り返ると同時に引き金を引き絞る。

しかし、銃はその命をシャロンに吸い取られたように弾が出てくることはなかった。

「ひゃああああ……！　わわわ悪かった！　許してくれ。ここるところは思うように狩りが……」

「うるさい。黙れ……」

情け容赦の無い冷たい声に、ウグツと喉を詰まらせたような声をあげる。

「あんたはあ……ここで死ぬの……ゆーあんだすたーん？」

クスクスと幼子のように笑いながら、ゆっくりと手を耳に当て、その手を首から胸、腹へと滑るようにならずらしてゆくと、遂には男の股間へと移動していき、そして……

「ぐしゃあああああ！　なぐんちゃっ……」

「ひいひいひい……あがあが……」

突然、耳元で叫ばれて男は情けなくも地面へと腰を抜かして、股からはジワリと染みが広がっていった。

「ちよ……！ やだ！ きつたな〜い。あんたハンターでしょ？  
勘弁してよ。」

自分が起こした事とはいえ、まさか失禁までするとは思って  
いなかったシャロンは慌てて、男の近くから大きく飛び退く。

恐怖で気を失った男は地面へと横たわり、口から泡を吹いてピク  
リとも動かなくなった。

生きている事だけを見て確認すると、シャロンはもうお漏らし男  
を視界にも入れたくないとはかりにバーへと向き直る。

その視線の先　バーの入り口付近に固まり、成り行きを見守っ  
ていた男達が小さく悲鳴を上げて、股間を手で押さえた。

酷く滑稽な……しかし、本人達にとってはシャレにならない切実  
な動きに、シャロンは軽い頭痛を覚えて、手の平で目を覆い天を仰  
いだ。

恐らくはまた変な二つ名……そう、【タマ潰しのシャロン】とで  
も付けられることになるだろう。シャロンは未だに股間を押さえ  
ている男達を無視してバーの中へと帰っていくのだった。

「おかえり」

「ただいまあ……。とんでも無い目にあっただわ……」

先ほどの無様な光景を思い出すだけで眩暈がするような気がする。

「？ そいつは災難だな。自業自得ともいうがな？」

「……もうすこし、優しくしてくれたって罰は当たらないと思うん  
だけどなあ？ あの馬鹿が私の事を悪く言っても、何も言い返して  
くれなかったし……」

拗ねた素振りて頬を大きく膨らませて唇を尖らせる。

「それも含めて自業自得だ。俺に黙ってそんな身体になったのはお前の選択だろうに……」

マスターは微かに揺れるシャロンの銀髪を見て、苦い砂を吐く様に呟いて返した。

その言葉を聞いて、拗ねた演技をしていたシャロンも申し訳なさそうに瞳をカウンターへと落として、温くなったミネラルウォーターを口に含んだ。

シャロンの髪は生来の色ではない。幼い頃は母親に似た綺麗な紅髪をしていた。

それが三年前、政府が進める強化人間プロジェクトに志願して帰ってきた時には、今の銀髪へと変わり果ててしまっていた。

酷い有様でバーの入り口に立っていたシャロンの姿を、マスターは今でも目に焼きついて離れない。

全身が傷だらけで無事な箇所を見つける方が難しい程の姿で、ただ、虚ろな目で異様に大きな金属ボックス　今も持っている対ドローン用兵器【ヘルシング】を背負った姿を……

気まずい雰囲気の中、突然入り口から入ってきた男達にバーの空気が弛緩する。

「……丈夫だ！　タマはあるぞ！　ちゃんと付いてるぞ！」

「うう……俺の……俺のタマがあ……タマがあ……」

うわ言のようにタマの心配をしている気絶したままの男に、それを運ぶ男達は励ますように声を掛けながら店内へと入ってきたのだ。男達としても失禁している男には触れたくは無かったが、炎天下の中で放置するのは見殺しにするようなものなのでなるべく湿って

いない無事な所を掴み運んできた。

ムワツとアンモニアの嫌な匂いが部屋に籠り出す。

「おい！ お前達！」

「ひい！ タマ潰しの……は、はいい！」

マスターが酷い匂いに鼻を摘まんで声を掛けると、振り返った男の視界に銀の髪が飛び込んできて狼狽する。

（ああ……やっぱ、その二つ名がつくかあ……）

シャロンも鼻を摘みながら、がっくりと肩を落とした。

「裏に井戸があるからそこに連れてって、水をぶっ掛ける。臭くてかなわん」

「は……はい！」

気絶した男を運ぶ仲間達は決して、シャロンから目を離さずにマスターに言われるままに店裏の井戸へと運び出してゆく。

「シャロン……お前ってやつは……」

「あは……あははは……ほんのジョークのつもりだったんだけど、ど……ね？」

責めるように半眼で睨みつけてくるマスターにシャロンは誤魔化すように頭を掻きながら、乾いた笑いを浮かべる。

その情けない姿を見て、店内に今日一番の溜息が響き渡るのだった。

## 捻れた螺子穴

「今日はこれからどうするんだ？」

「あゝ……緊急性のあるドローンはいる？」

マスターはグラスを磨くを手を止めて、カウンター下にあるハンター端末を引きずり出す。

二世代前のような液晶モニターを見ながら端末を操作してゆくと眉を少し顰める。

「どうかした？ どこかの集落が消えたとか？」

基本感情を表に出さないマスターの変化に、ろくでもないものを感じて身を乗り出してモニターをみようとするが、見えそうになった瞬間には終了してしまい、画面は暗く鏡のごとく覗き込むシャロンの顔を映しただけだった。

直後に頭に激しい衝撃と痛みが走る。

「っ！ つああー！」

「覗こうとするな！ 一介のハンターが見ていいもんじゃない！」

拳骨で殴られた頭を手で押さえながら、涙目になると子犬のような唸り声を上げて、カウンターの外へと体を引っ込めてゆく。

「うう……伯父さんの愛が痛い……」

「冗談言つな。躰ではあるが愛はない」

「ひどいわッ！ ベッドではあんなに愛してるって言……いだあ！」

先ほどよりも激しい衝撃に頭が襲われて椅子から転げ落ちた。床で転げまわった後、シャロンは涙の浮かんだ目で見上げると、カウンターから拳が突き出していた。

「人聞きの悪い事を抜かすな！ まったく……。とりあえずは近場にドローンの目撃情報も電波反応もないそつだ。とつとと自分の部屋へ帰れッ！」

「人の頭を気軽にポンポンと！ 私の頭がパンチドランカーでアルツハイマーになって、クルクルパーになったらどうしてくれるの！」  
「心配するな。お前が今言ったどれよりも常に酷いポンコツ頭だから、良くなる事はあつても悪くはならん。それより早く帰れ。仕事の邪魔だ」

「うう……グスン……」

シャロンは立ち上がると、野良犬を追い払うようにあつちへ行けと手を振るマスターに涙目で一睨みすると、棺の様な大きさの銃を持ち上げて、カウンター横の扉をあけて、マスターとシャロンの自室へと続く廊下へと入っていった。

重い銃を背負った足音が遠ざかるのを聞いて、マスターは軽く鼻を鳴らすともう一度、端末を操作してモニターを見つめる。その姿はシャロンが今まで見たことも無いような苦渋に満ちた顔をしていった。

「まったく、伯父さんは私をなんだと思っているのかしら！」

シャロンに割り振られた自室に入る。部屋の隅にある鉄板で補強された頑丈な床に銃を降ろすと、ドレッサーの前に座った。

シャロンは何をするでもなく、鏡に映る自分の瞳を見つめた。

鏡のシャロンも当然の如く、瞳を見つめ返してくる。

紅というには少し薄いピンクの眼がぶつかり合う。  
まるで合わせ鏡のように瞳の向こうに何十人ものシャロンが映っている。そのどれもが表情はなく飾りの無い仮面を思わせる。

「私はシャロン・ヴァルローネ。シャロン、シャロンシャロンじゃろん……化け物とは違う。化け物じゃない。化け物なんかじゃない。私は人間。人間だ」

胃から不快感が押し寄せて眉が顰められる。 否、胸かもしれない。  
否、存在自体が不快感の元かも……？

定まらない思考が、シャロンの頭をグルグルと巡る。体が強張り手の平も強く握り過ぎた為にポタポタと血の滴が床へと落ちた。

「私は人間。私は……。だああああっしやー！」

何かを打ち破るように両腕を高々と掲げて、大声を上げて立ち上がった。

次の瞬間……

バーへと続く扉が開けられると同時に、怒声が少し離れたシャロンの自室まで届いた。

「うるさいッ！ 少しは静かにしろ！」

聞きなれたマスターの声に固まっていた表情が少しだけ緩む。

「じゅめーん！ ちょっと、悪霊と戦ってたのぉー！」

「知らん！ エイリアンだろうが、地底人だろうが殺るなら静かにしろッ！」

この掛け合いもいつもの事だ。月に二、三度……多い時は週に一度は、頭がグチャグチャになる感覚に見舞われて、今回と同じようなやり取りを行ってきたのだ。

大抵は誰かに酷く罵られたり 嫌われたり あからさまに避けられたりした時に起きる。

それをマスターも知っている。だからこそ早くにシャロンを自室へと帰したのだ。

店へと続く扉が閉じられる音を聞いて、シャロンはほんの小さな溜息を吐いた。

そして、視線を血が垂れている両手へと落とす。そこには血の跡はあるものの、ハンカチを濡らして拭き取った後でみると爪が食い込んだ傷は綺麗さっぱり消え去っていた。

ナノマシンでいくつかある力の一つ、再生能力だ。傷の度合いにもよるが掠り傷程度ならば一瞬で完治してしまう。

(化け物……そう、言われても仕方がないっか……)

自嘲気味な笑みを零すと、壁に立て掛けてある大きな銃へと歩みよると、そっと銃を床へと引き倒した。

縦一七〇センチ横一〇〇センチの人が入りそうな幅の大きな銃は形から一見して銃には見えず、棺だと言われても納得してしまいそうになる。

敢えて、棺と違う点をあげるならば、棺とは違いまったく装飾は成されておらず、箱状の縁を細かい傷の付いた鈍く光る鉄棒があるだけで、残りは墨を塗ったように艶の無い黒色一色だ。

さらに決定的な違いは、その先端に付いた大きな穴である。

銃と呼ぶには馬鹿馬鹿しい大きさの穴は銃口というよりは砲口と呼んだ方がしっくりとくる。 直径一〇センチにもなる銃口が縦に

二つ並んで開けられていた。その穴こそがこの棺を銃足らしめているのだ。

シャロンは銃を前に目を閉じると、目の前に鎮座する【ヘルシング】と呼ばれる銃へと手を伸ばす。

瞼が遮った最後の光景を脳裏に浮かべて、ヘルシングに触れると慣れた手付きで分解し始めた。

目を閉じているとは思えないほど、手際よく分解整備してゆく。

瞬く間に床一面は整備済みの部品だらけへと変貌した。

そこに至って漸く閉ざしていた目をゆっくりと開いて、小さく溜息を漏らした。

(銃の整備が精神安定剤だなんて……我ながら荒んでるなあ……)

心の内で苦笑を一つ漏らして、分解整備していた時と同じように目を閉ざして組み上げてゆく。

銃が分解される前の状態……棺状まで戻された時には天高く輝いていた太陽も地平線の彼方へと姿を消して、入れ替わるように空に浮かんだ月の明かりだけが、シャロンと大きな銃 【ヘルシング】を照らしていた。

シャロンは小さく溜息を付くと立ち上がり、腰の後ろに吊るしている五〇口径という大口径自動拳銃をガンベルトごと外して、ベッド脇のテーブルへ他の装備品と共に置く。

それから一つ大きく伸びをした後、ベッドへと飛び込んだ。

ベッドで仰向けになり、シャロンは自分の手と天井を視界で重ねてみる。

ガンオイルで黒く汚れている以外は、ナノマシンの影響で同年代の少女となんら変わることはないように見える手……、

だが、シャロンの視界にはガンオイルは血の染みに見え、さらに鼻にこびり付いた硝煙の匂いが心を落ち着かせると同時に何故か精神はざわめきたつような相反する気持ちになる。

「はぁ……やばいなぁ……こんな時は必ず悪夢を見ちゃうんだよね……うっ！」

少し気だるくも感じる体に喝を入れて上半身を起こすと、テーブルに手を伸ばして置いてあるポーチから今では希少なプラスチックケースを二つ取り出した。

二つのケースから中身であるいくつかの薬を取り出すと一つは普通に飲み下し、もう一つの錠剤は口に放り込むとガリガリと音を立てて噛み砕いてから飲み込んだ。

(薬の飲み合わせ最悪だけど、まあいいよね?)

再度、ベッドに仰向けになると薬を取り出したケースを掲げて振ってみる。

中からはカラカラと音を立てて、残り少ない事を音が示してくる。

「免疫抑制剤も残り少しか……明日、貰ってこないとなぁ……ああ、やだなぁ。きつとまたドクに怒られ……」

明日の予定をそこまで考えたところで、シャロンの手から免疫抑制剤の入ったケースが滑り落ち、床を音を立て転がってゆく。

噛み砕いて飲んだ強力な睡眠薬が、シャロンの睡魔を加速させてゆく。

床に落ちた薬のケースが壁にぶつかり、その音を止めた時には持ち上げていたシャロンの手もベッドへと倒れ、規則正しい寝息が部屋を満たしていた。

一時間ほど経った頃に部屋の扉が静かに開けられる。

そこからランタンの淡い光が室内へと入り込み、その光を追ってマスターが室内に体を滑り込ませた。

扉こそ音を立てずに気を使っていたが、足音は消そうともせずの不躰なまでに音を立てながら室内に入ると、ランタンの揺れる明かりに照らされた部屋を見て溜息をついた。

床に置かれたヘルシングに加えて点々と染みを作っている乾いた血痕を見たのだ。

いつもの事とはいえ、慣れるものではない。

ゆっくりと足音を立てたまま、ベッドに近付いてゆく。下手に足音を消して近付けば、その気配を感じて防衛本能から逆に起してしまふ事を、マスターは昔の経験から知っていた。

ベッドの直ぐ脇まで来て、スヤスヤと眠るシャロンの寝顔を見下ろす。

「……………馬鹿娘が……………少しは大人を頼る事を覚えればいいものを……………」

その視線の先には寝息こそ規則正しいが、閉じた目尻にうつすらと涙が浮かんでいるのが見えていた。

無防備な寝姿のシャロンにマスターは布団を掛けてやると、昔とは違ってしまった髪色の頭を優しく撫でて部屋を後にする。

マスターが部屋から出た後で、シャロンが浮かべていた涙は消えうせ、口元には微かに笑みが浮かんでいたのを、マスターは気付くことはなかった。

## 水面下のバネ

ブラインドの隙間から差し込む朝日で室内の埃が際立つ。

ハンターズバーは通常のバーとは違い、朝は日の出から夜は遅くまで営業している。

薄暗い室内には活気もなくバーカウンターの向こうでは、この店のマスターが無表情にグラスを磨いている。

そのカウンターの横……古びた扉が開くと短い銀髪をボサボサにしたシャロンが姿を現した。

うっつと現れた姿は、ホットパンツに短めのベスト、むき出しの足は光沢のあるピッチリとしたタイトスのようなもので瑞々しい肌を隠している。

昨日、帰ってきた時と変わらぬ姿に、マスターは小さく溜息をついて磨いていたグラスを直して、シャロンに向き直る。

「予備の服を出してあっただろう。少しは身嗜みに気を使うとか女の真似事もできんか？」

「うっつ……あんまり、怒鳴らないでえ……寝起きにマスターの怒鳴り声はキツイよう」

眉根を寄せて顔を顰めながら、カウンターシートに座ろうとした時にふとテーブルに数人の見慣れない男達が居る事に気付いた。

「マスターあの人達って……」

「よお！ 嬢ちゃん！」

シャロンがマスターに問いかけようとした瞬間に後ろから野太い声が掛けられる。

久しく聞いていなかったその声に対して、シャロンは顰めた顔を更に苦渋に染めると渋々ながら声の主へと振り返った。

そして、繰り出された右拳は見事に相手の腹部を捕らえる。

「ゴハツ！」

「なんで、あんたがここにいるのよ……ガーディ！」

ガーディと呼ばれた男は殴られた腹を擦りながら、視界の端に映った色めき立つテーブル席の男達に手の平で座れと指示すると、男達は浮かしかけた腰を椅子へと戻した。

「うつつあつ。あいつかわらぬ馬鹿力だな！ 久しぶりとはいえ随分じゃねえか？」

「あんたがあたしの尻を揉もつとするからでしょうが！」

「ばつか！ おめえ尻は揉む為にあるもんだろ。挨拶で揉むのは当然だ！」

「あなたの常識は非常識なんだから、今度しようとしたら“潰す”わよ！？」

「はっはは！ 流石はタマ潰しのシャロン様だな」

ガーディの言葉を聞くなり、シャロンの顔が青褪める。そして、バツと振り返るとマスターがあらぬ方向へと視線を向けて、器用にもグラスを見ようとせせず、オレンジジュースをグラスへと注いでいた。

（こんど……伯父さんのお気に入りコーヒークップ割ってやる……っ！）

「んで？ あんたがなんているのよ。あなたのテリトリーはイーストタウンでしょ。ここはノースタウンよ。ボケて帰る街でも間違え

た？」

白い目を向けながら、ガーディに問い掛ける。

ガーディはよく日に焼けた髭面をニツと歪ませて、シャロンの隣へと腰掛けた。

「決まってるんじゃないか。嬢ちゃんの尻を……ととつ、ジョークだよ。そう恐れ顔して睨むなよ。俺様は意外と小心者なんだぜ？」

「いいからチャツチャと話す！ つまんない事を言ったらヘルシングでケツにもう一つ穴をこさえるわよ」

ガーディは冗談にも聞こえるシャロンの言葉に、両手を上げて肩を竦めて見せる。

この髭面の男はイーストタウンを根城とするドローン狩り集団【アイアンシッケル】を纏めるリーダーだ。

【アイアンシッケル】この大陸でも五本の指に入るほどの有名で、政府も一目置いている人物だ。構成人数を百を超える人間を束ねて、集団でドローンを狩る旅団式と呼ばれる狩り方を行い、なるべく犠牲がでないように安全に狩る事を得意としている。

それも主に大物のドローンをである。

シャロンにはそれが気に食わなかった。荒野やドローン狩りで出会ったり、獲物が勝ち合ったりして、今でこそ友好的だが、煮え湯を飲まされた事も少なくは無い。

だが、ドローンハンターの礼儀だけは弁えている男なのだ。無闇矢鱈と人のテリトリーを犯すような愚を冒したりはしない。しかし、現にここにいると言う事は何かがあったという事だ。

「ん……ああ、こつちにな。うちの奴が狩りでハマこきやがってよ？ ノース方面に逃げられちゃったらしいんだわ。そいつを追ってな？」

「へマって……あんたんとこにしては珍しいじゃない？ 旅団式は何度か見せて貰ったけど、逃げられるとは思わないんだけど？」

シャロンの追求に、ガーデイはマスターが出してくれたビールに口をつけて、大きく息を吐いた。

その間、シャロンも何も言わずに、ガーデイの話すのを待つ。

「んー、まあな。ド阿呆なルーキーが調子こいた拳句に単独狩りなんて、馬鹿な真似をしてくれやがってな？ そいつのケツを拭くためにここにきたって訳さ。でも、流石に人んテリトリーで好き勝手する訳にはいかねえだろう？ だから、こうして筋道通しに来たって訳さ。んな？ マスター？」

ガーデイの言葉にマスターは何も言わず、ただ一度だけコクリと頷いて見せただけだった。

「まあ、いいけど……？ なんなら手伝いましょうか？」

「いらねーいらねー！ こうして俺様まで出張ってきてんだ。偵察型のドローンなんていう小物だ。それに身内の恥をさらせねえよ。まあ、今日にでも狩って帰らあ。騒がしてすまん？ 嬢ちゃん」

ふーんつと呟きながら奥のテーブルに座っている男達をよく見てみると、その男達はシャロンも見知っている男達だった。

何故なら、【アイアンシッケル】の中心にいる幹部クラスで、中でも戦闘力が高く一人でも偵察型程度のドローンならば狩れる者達なのだ。シャロンも何度か手合わせをした事があった。

「シャロン。今日はドクの定期健診日だろ。さっさと行って来い。それとわかってるな？」

「はいはい……、お行儀よくしろ！ 他所様の食卓を覗く奴は頭を

ぶつ飛ばされても文句は言えないーでしょ？ わかってるわ。お・  
じ・さ・ま」

「……シャロン」

からかい半分で言った言葉に、マスターは躊躇わずに腰の後ろに吊っているリボルバー式マグナム【ブラックホーク】を抜こうとするのを見て、シャロンは目の前に置かれていたミルクを一気に飲み干すと、脱兎のごとく出口へと駆け出していった。

「クツクツ……おじさまも大変だなあ……おっと、こつちまで睨むんじゃあねえよ……」

ガーディをジロリと睨みつけるマスターに、視線を振り払うように手を振る。

マスターは溜息を吐いて、磨いていたグラスを棚に戻した。

「お前のところにドロを被らせて悪かったな……ガーディ……」

「いーつてことよ。あんたには何度か世話になったしな？ それにしても間違いはねえのか？ 急いでこんだけのメンバー集めておいて、冗談は人死がでるぜ……？」

先程までのおちゃらけた雰囲気を引つ込めたガーディは、本来の凜猛な殺気の籠った視線でマスターを睨みつける。

「……間違いは無い。信用の置ける人物からの情報だ……。何故こんな時と思うが……政府も動きはじめる前に手を打たねばならん」  
「だが、こいつを仕留めれば……全ては終わるってか……」

ガーディはポケットの中から、折り畳まれ少し皺の寄った紙を取り出して、広げて見る。

そこに書かれているのは、ドローンのタイプと形式番号だ。

極ありふれたドローンの手配書にも見えるが、赤文字で最重要と  
かかれており、紙の下には通称名が書かれていた。世界をここまで  
荒廃させ、人の道具であったドローンを人類の敵へと進化させた最  
初の敵の名前が『ディザスタ』と……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2698x/>

---

ハート・オブ・ザ・ギア

2011年10月27日08時10分発行